和紙

装飾料紙の歴史と現代料紙について

【料紙の歴史と鑑賞】

料紙装飾の歴史と現代料紙について

中井之山

一　料紙とは何か
二　書きやすくする加工
三　日本における料紙装飾の変遷
四　料紙装飾の種類と加工法
五　おわりに

（1）「料紙」とは何か

①紙の出現……紀元前の中国にはすでに紙が存在したとされるが、最古例は三世紀。

②紙の種類

a、生紙（きがみ）　漉きあげられた状態そのままの紙のこと

b、熟紙（じゅくし）　後漢の末期から盛んとなった加工された紙のこと

＊熟紙は、おもに写経や公式文書などに使用されており、当時の加工とは紙を書きやすくすることが第一の目的であり、装飾性よりも実用性が高かったといえる。

（2）書きやすくする加工

当時の溜め漉きで漉き上げられた紙（麻紙）は、表面が凸凹で繊維の密度も荒くとても滲みやすく書写には適さないものが多かったため紙に加工が施された。

①研光法……紙を切き平滑にする技法

＊卵形石や巻貝の殻、陶器の滑らかな面などで紙を一枚一枚、何千回も手磨きする加工方法で、現在でも数珠を使って紙面を磨く方法がある。

②槌打砧光法……紙を重ねて木槌で打ち叩く技法

＊植物の粘液で湿らせた状態の紙を石の上で千回打ち、一度閉き乾かしてから、さらに湿らせ千回打つことにより紙面が光沢を発する。後世、木槌を竹竿などに吊るし木槌の自重と重力を利用して紙を打つ提槌（さげつち）なども考案された。作業をオートメーション化して、少しでも負担を軽減しようとした試行錯誤の様子がうかがえる。

＊打ち紙の加工は江戸時代まで用いられるが、紙漉きの技術の発達により生紙自体のクオリティーが向上し、打ち紙加工の必要性が減少する。

③滲み止めa……秦代以降、米粉など植物澱粉を用いて紙料液に加えるなどの方法

＊植物澱粉層には日が経つにつれ亀裂が生じたり、紙魚の害を受けやすくなる。

④滲み止めb……唐代になると、動物の膠に少量の明礬を加えた礬水を紙面に塗布するか紙料液に混ぜて漉くといった方法

＊ドーサ（膠水）は、多く含み過ぎると紙面が強いコーティング状態となり墨線（書線）の躍動感に欠けるという点で、逆に書きづらくなる。これは書の作品を制作する方々にとって紙を選ぶ重要なポイントのひとつといえる。現代ではドーサの上に薄い膠を引くことで墨と相性を良くする加工も施される。

⑤滲み止めc……滲み止めaに近似するが、填粉を紙の表面に塗布する方法

＊石膏・石灰・陶土などの粉末を澱粉と混ぜ合わせ、それを紙の繊維の隙間を埋めるように、刷毛で塗布する技法で、紙面を平滑にすると共に紙の透けや滲みを防ぐ加工で、かな料紙の加工においては、胡粉や雲母などを用いた具引などがある。

（3）日本における料紙装飾の歴史的な変遷
―奈良時代から現代まで―

奈良時代

日本は奈良時代に唐代の製紙技術がもたらされたとされ、礬水や打紙（槌打研光法）が滲み止めの基本となっている。奈良時代では写経などを中心として、虫害等を防ぐために、黄檗（キハダ）の樹皮などで染めた紙や丁子を吹き付けたもの（丁子吹き）など、染め紙が流行する。正倉院には様々な色紙が伝存している。

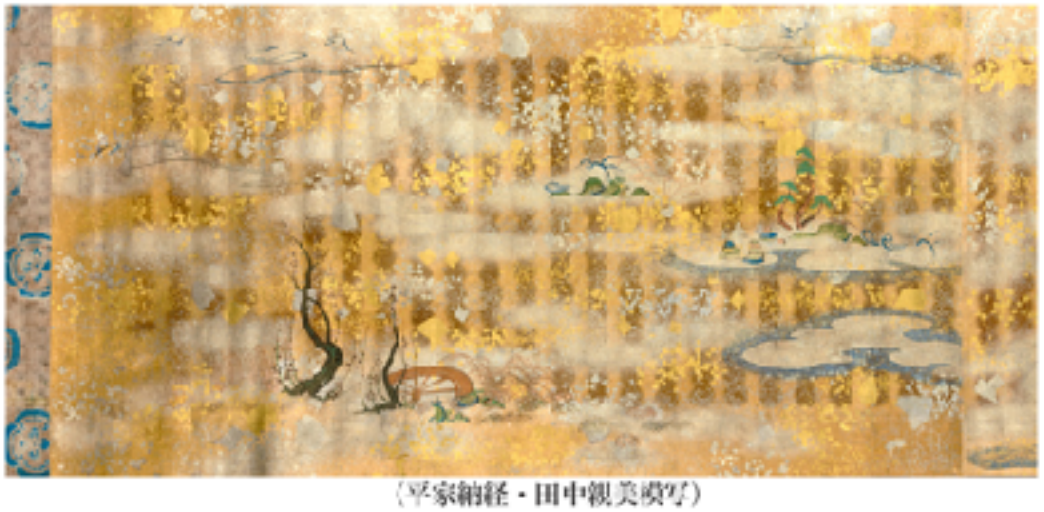
平安時代

奈良時代以降、仏教の隆盛とともに写経事業は一層盛んになり、平安時代後期には末法思想の思想とともに功徳・荘厳のための装飾的な写経料紙や表紙・見返しなどの豪華な装飾も多く作られた。技法としては、金銀の箔や泥を用いた装飾が隆盛を極めるとともに、唐紙や雁ぎ紙など、様々な料紙装飾が発展する。和歌の流行とともに装飾和紙は、かな料紙として技術の最盛期を迎え様々な表現と技法を生み出した。現存する国宝・西本願寺三十六人家集には39帖におよぶ多種多様な装飾のかな料紙がみられる。「平家納経」や「本願寺本三十六人家集」（石山切など）は、料紙加工の最盛期の技を垣間見ることの出来る素晴らしい遺品といえる。

さらに、最盛期を迎えると共に、文字の布置に影響を及ぼす程の装飾が見られるようになり、本来の引き立て役としての性質を凌駕したものと変化していく。つまり、料紙加工が独自の世界観を展開する歴史のひとつの区切りでもあったとも言えるだろう。

（本願寺本三十六人家集
石山切貫行集下）

（紫紙金字華厳経）



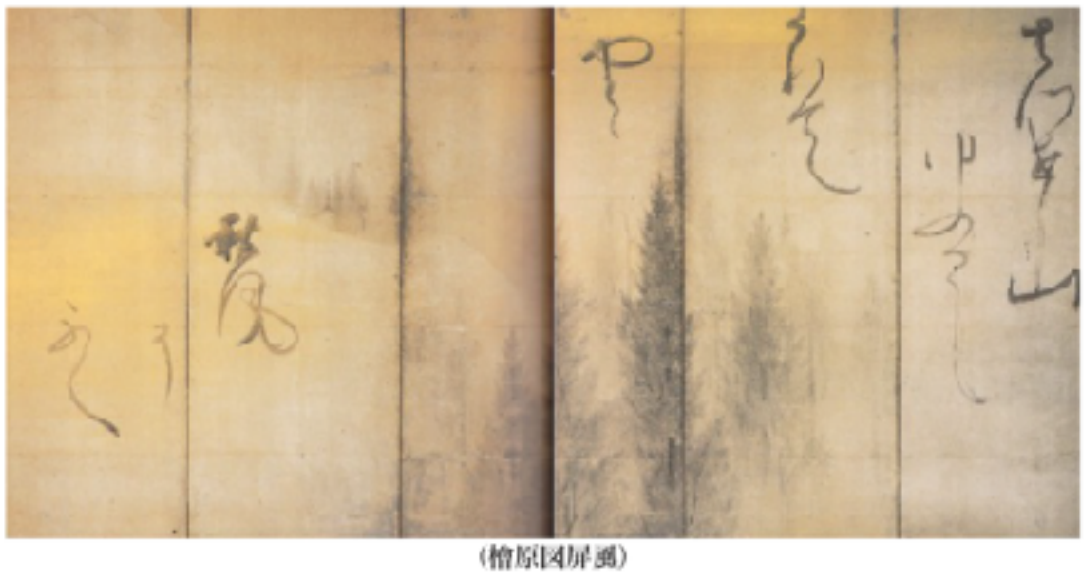
（平家納経・田中親美模写）

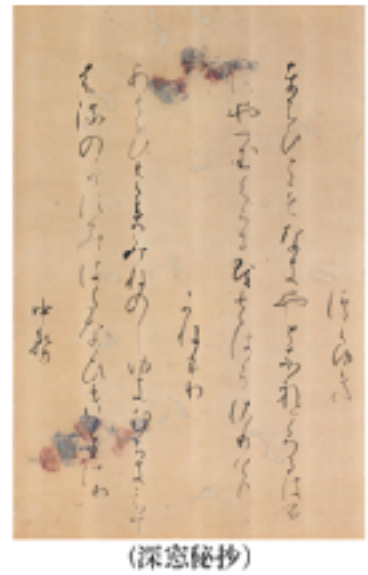
鎌倉〜室町時代

鎌倉時代以降の料紙装飾は、写経用の料紙など華やかさは残りつつも平安時代の優美さからは衰退し、武家政権への流れの中、紙は芸術性よりも実用・実務的な面や趣のあるデザインが重視されたように見える。その中でも藍と紫の打雲紙や、金泥下絵を施した控えめな料紙装飾は見られる。
雲紙のデザインも歴史とともに、流行のようなものが見られるが不明瞭分は多く、現在では当時の雲紙の複製の為の研究も行われている。

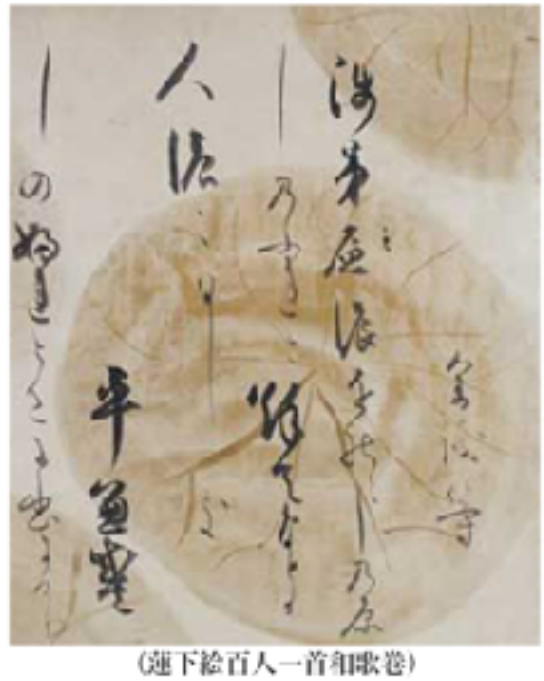
桃山〜江戸時代初期

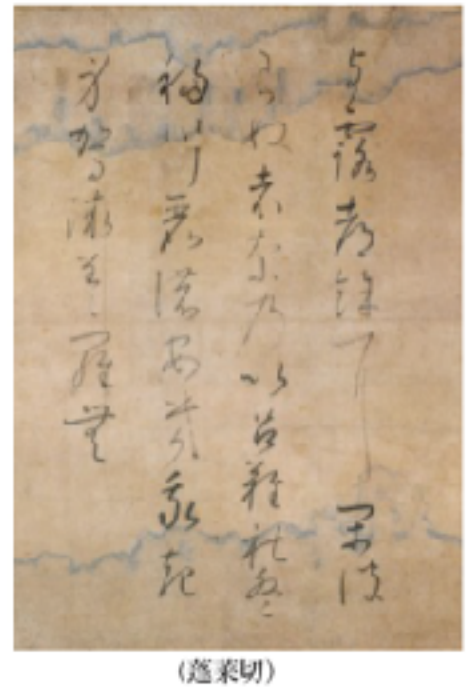
桃山時代から江戸時代にかけては、近衛信尹の「三十六歌仙帖」など平安時代の優美な料紙を再評価する試みの作品のほか、長谷川等伯による下絵に大字な仮名を書いた作品の「檜原図屏風」や琳派制作の下絵と思われる「源氏物語和歌色紙貼交屏風」など、かつての装飾性を再興しアップデートすることを、本阿弥光悦や宗達・光琳などの民間の組織化した絵師たちによって行われ、アカデミックな狩野派に対してのカウンターカルチャーとなった。宗達の金銀泥装飾下絵は絵画的な表現で、大胆にクロップした構図やミニマルな表現を用い、濃淡や垂らし込みの手法を使って独特な質感を表現したり、本版刷りの不規則に生まれるムラを意図的に表現するように、斬新な技法や手法を生み出し、意匠性や装飾性に新しい時代への指向を展開させる。このような絵と書のコラボレーションでも、屏風や障壁画として装飾が大字仮名などとともに、より総合作品的に成熟する。彼らの感性によって料紙の装飾加工はさらに発展し、新たな最盛期（＝デザインの変革期）を迎えたといえる。そのように掛軸・屏風や障壁画などの建築とともに発展した装飾技術は、美術という概念が入ってくる以前に感覚として工芸の中でも培われていた。


（檜原図屏風）


（深窓秘抄）

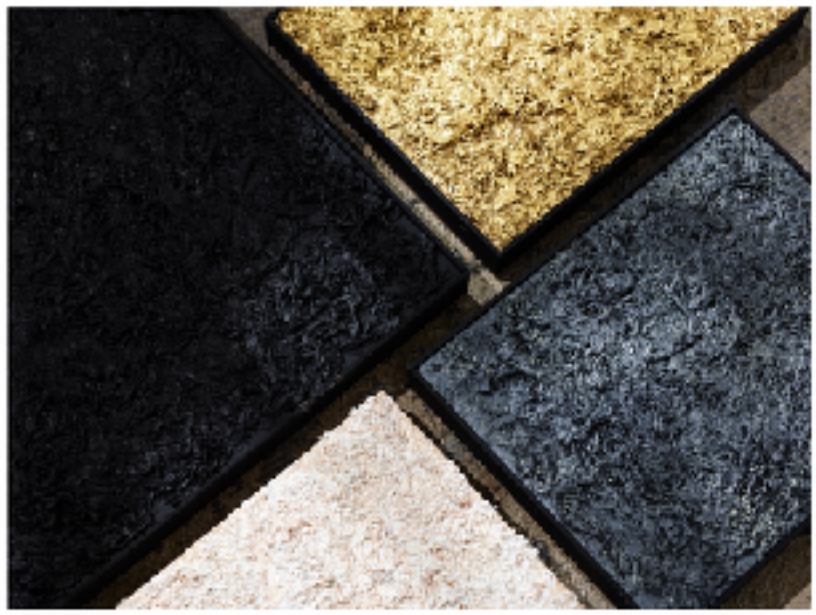
（四季草花下絵古今集和歌巻）


（蓮下絵百人一首和歌巻）


（蓬莱切）

近現代

現代の和紙装飾文化は、建築様式の変化に伴い襖や障子などの需要も減少して、量産型の和紙クロスなどの生産が増える中、一部ではオリジナリティーの高いハンドメイドの装飾和紙壁紙やアートワークが生産されている。然し文字を書くための装飾料紙としては、田中親美（一八七五年～一九七五年）による「平家納経」や王朝美の復元などで、伝統技法の解明・研究が進められたが、それ以降の大きな発展は見られない。明治の文明開化以後、美術という概念の移入とともに戦後には、書道の分野でも様々な前衛活動が盛んになるが、書芸術の前衛運動は一九六〇年以降だんだんと、その純粋性を失っていく。前衛活動によって一つの様式は生まれたもののそれは漢字の分野にとどまり、料紙装飾や仮名書の分野には派生する事なく、仮名と料紙が、確かな文脈を継承して変遷することはなかった。書道の展覧会などでも、印刷技術の発達や作品の壁面展示のサイズアップが流行し量産品の料紙を用いてコストを削減するようなスタイルが定着している。



制作：INKSTONE
撮影：Nakamura Soichiro

（4）料紙装飾の種類と加工方法

①染め紙

染料または顔料で紙を染める加工。浸し染め、漉き染め、引き染めなどの技法がある。

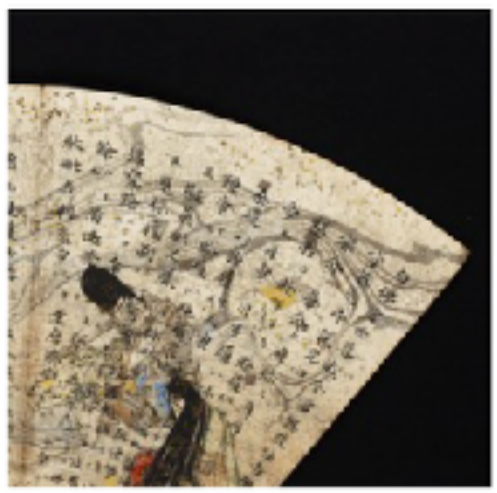
＊古くは後漢以前よりあったとされ、日本では染色技術を導入した後、様々な工夫がされ同色の色紙が作られる。

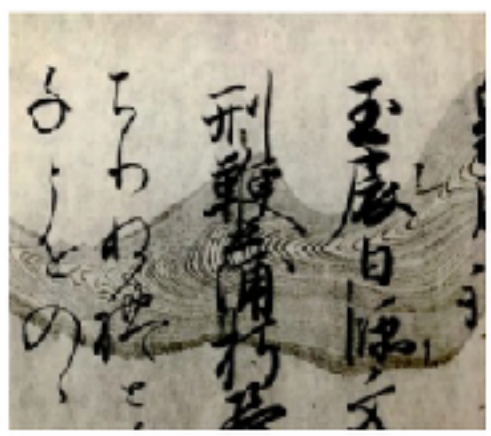
漉き染めは、染色した紙や反故紙を水でくずし、それを混ぜて漉く、漉き返しや打雲紙（打曇紙も）飛雲紙も漉き染めの一種と考えられる。

＊「図巻本古今集」にも様々な染め紙の技法が見られ、萌黄に見える料紙も紙を黄色に染色した後に藍の繊維を漉きかけて萌黄（黄緑）に見せる加工が施される。

②墨流し

墨流しは、中国にある流沙鑒から伝わったものとされているが、明確な時期や経緯は不明である。『古今和歌集』に墨流しを詠んだ和歌があることから、九世紀以前には日本に墨流しというものがあったということがわかる。古筆を眺めると、12世紀頃の「本願寺本三十六人家集」や『扇面法華経冊子』は、それぞれ表現の違いが見られるものの、自然な水流を印象付けるような伸びやかで流麗な表現がなされていて、鎌倉時代には、「墨流切本和漢朗詠集」のように同心円の密度が高く、伸びやかさというよりも屈折や湾曲が多く見られ、せしめ筆の円形も残ったままになっているものも見られることから自然の流れというよりも、せしめ筆で意図的にデザインされているように、初期のものとは対照的で圧縮された墨線の表現がなされている。江戸時代の工芸活動の中では、過去のものとはまた違って風波の表現が多くなり、連続的な山路文様や渦模様のように変化して、また藍や朱も使われ金泥で書き添えたような色彩も加えられているものがある。墨流しの装飾は、他の料紙装飾に比べ、現存する数が少ないことからも江戸時代以前の墨流しが、装飾の為だけに用いられたかどうか、調査する余地のある技法であると考える。





（図録本和漢朗詠集）

（右上：国宝扇面法華経冊子）
（左上：江戸時代墨流し表紙）
（右下：墨流本和漢朗詠集）

③金銀装飾

金銀箔（切箔、野毛、砂子）、金銀泥などによる装飾技法。中国では紙の上に膠やフノリの粘着剤を引き、金銀粉を撒き散らす洒金があり、その技法が日本において独自に発達したもので、正倉院文書には、金薄敷・銀薄敷や銀塵などの名も見られる。遣唐使の廃止によって、より繊細かつ自由な表現のできる技法となっていく。

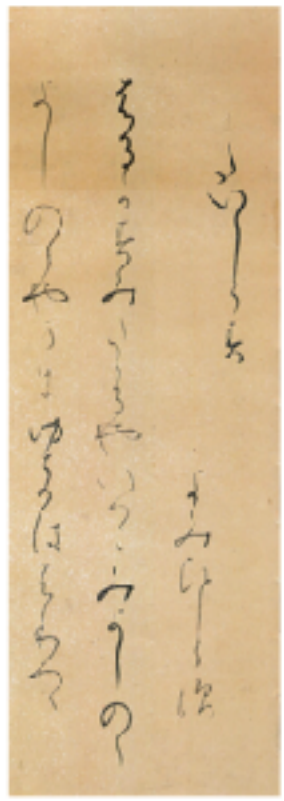
（本願寺本三十六人家集）

（本願寺本三十六人家集）

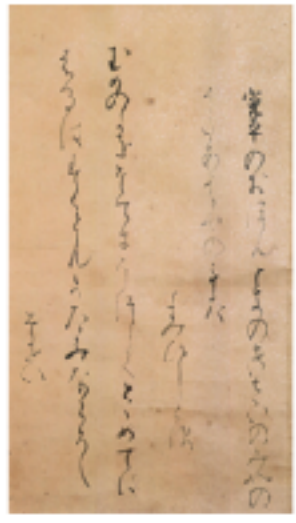
（元永本古今和歌集）

④雲母砂子

雲母を細かくしたものだが雲母引きの粉末よりも粗い粒。「高野切古今集」などにも雲母が撒かれている。後に加飾されたものなども散見される。天然鉱物である雲母は、砂子の金属的な光よりも透明感のある反射が特徴である。



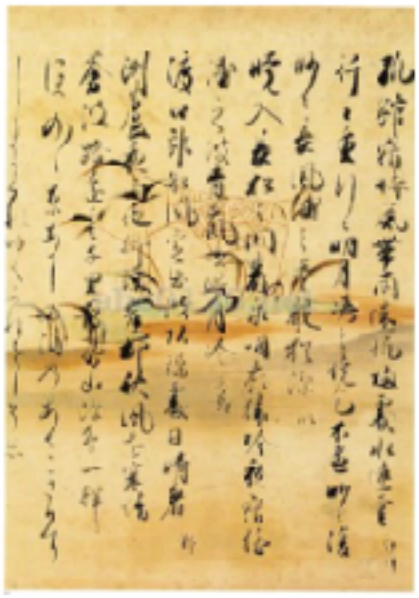
（高野切第一種）



（高野切第一種）

⑤下絵

墨、緑青や金銀泥などを用いて、手描きで下絵を描く方法。モチーフも細かな草花や鳥から絵画的なものまで様々であり、また時代の流れからも技法や表現の違いを見ることができる。

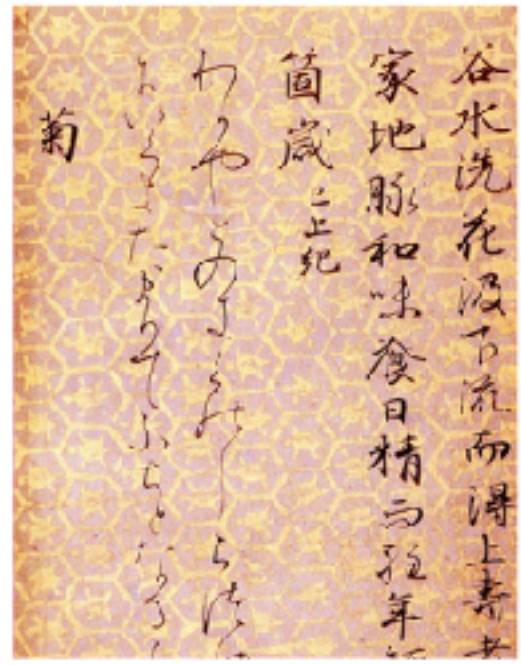


（草手絵和漢朗詠集）

（本願寺本三十六人家集）

⑥唐紙

具引きした紙に雲母で版木文様を刷ったり、模様を刷りだす蝋箋や空刷りなど技法も様々である。中国から輸入したものを『唐紙』日本で作られた様々な文様を表したものを「和製唐紙」と呼ぶ。三十六人歌集にも最も多く使用されており、多くの文様の種類があることからも装飾性と量産性を兼ね備えた技法であると言える。



(粘葉本和漢朗詠集)

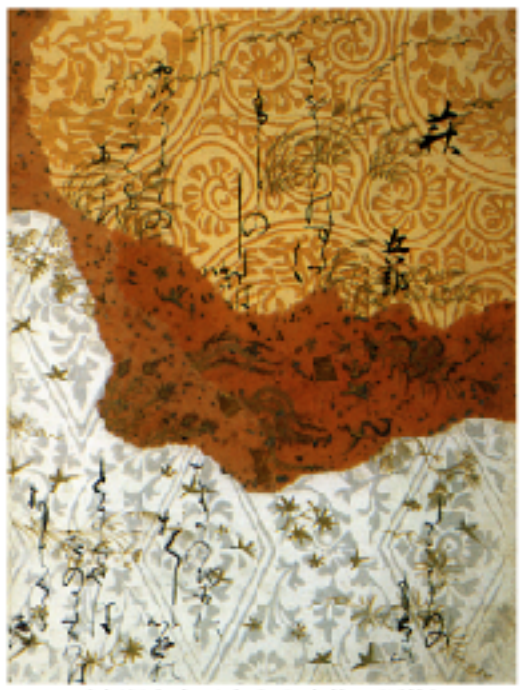
(本願寺本三十六人家集・素性集)

(元永本古今和歌集)

⑦継ぎ紙

破り継ぎ、切り継ぎ、重ね継ぎなどの加工で自然の景物を表現する方法。重ね継ぎは染め紙をほんの数ミリづつずらして貼り合わせてゆく緻密な加工。三十六人歌集にも多くの使用があり装飾技法が円熟期になったことを示す、優れた技法の一つである。

(石山切・貫行集下)



(本願寺本三十六人家集・順集)

（5）おわりに

古の料紙制作者や工芸家たちも私たちと同じように、常に未来を意識して新しい試みに挑戦し続けてきただろう。技法や構図の表現についても経年変化を意識したり自然美から得た着想で、料紙制作をしていたのではないだろうかと考えられる。古筆における浸みや褪色の変化、寸松庵色紙に見られるような揉み皺のような胡粉の剥離も、復元の範疇では当時のように修復することも必要もあると考えられるが、現代の鑑賞においてはそれらの風化を含めたものがひとつの美として扱われている。現代料紙はそういった風合いの料紙をつくることでも、古筆への興味や関心のきっかけになると考える。

一方で、料紙装飾の技法や歴史の素晴らしさに少しでも触れてもらうために書道教育や作品制作の現場への展開が必要である。時間や予算に制約の多い教育現場においては、料紙装飾の伝統技法を実践するのは難しい。然し、それは現代料紙の技法と取り入れることで容易に授業展開する事が可能である。まず高価で扱いの難しい道具の代わりとして、低予算かつ日常に手に入るものを道具として代用し制作できることである。ついで難しい技法を簡略化し限られた時間のなかで効率よく失敗のリスクを減らす実技指導ができることも利点といえる。授業を通して料紙加工の魅力や楽しみを知るために、成功体験も重要な要素である。現代料紙はそのように問題を解決するための技法やノウハウを紹介することで、料紙装飾を学校教育や芸術・文化の場などでも広く展開することが可能であると考える。

然し、料紙加工の工芸は失われつつある事も示唆している。後継者不足や需要の減少に悩まされているが、伝統工芸の必要以上な制度化や無意識的な継承が招く業界全体の衰退が予測されるのであれば、もっと間口を広げて既存の習慣から抜け出す必要性がある。漢字、かな、近代詩文、調和体などの作品を書くための紙としてのみならず、料紙技法と歴史がもつエキゾチシズムが芸術・文化の領域にも表現されて行くことによって新たな世代へと繋ぐことのきっかけになるように、技術や歴史の文脈を蓄積しながらも、文化や時代とともに、進歩し続け交換可能な状態であることが不可欠であり、それは伝統というものの鮮度を考える行為である。

【参考文献】

・高城弘一・野中直之「装飾料紙の研究」（『二〇一七年度 大東文化大学人文科学研究所報告書』、二〇一八年三月）
・金子馨「料紙加工の現代的な方法について―教育の場への展開を視野に―」（『跡見学園女子大学文学部紀要』第五十二輯、二〇一七年三月）
・島谷弘幸編『料紙と書―東アジア書道史の世界―』（思文閣出版、二〇一四）
・名児耶明・高橋裕次著『仮名文字と料紙の美―和様文化を味わうために―』（モリサワ、二〇一四）
・久米康生著『和紙つくりの歴史と技法』（岩田書院、二〇〇八）
・東京国立博物館・読売新聞社編『大琳派展―継承と変奏―』（読売新聞社、二〇〇八）
・『王朝美の精華・石山切　秋季特別展』（徳川美術館、二〇〇七）
・湯山賢一「和紙に見る日本の文化」『文化財学の課題―和紙文化の継承―』（勉誠出版、二〇〇六）
・『彩られた紙料紙装飾　秋季特別展』（徳川美術館、二〇〇一）
・飯島太千雄著『王朝の紙』（毎日新聞社、一九九四）
・村上翠亭・福田行雄著『かな料紙の作り方』（二玄社、一九九四）
・『手漉き和紙』（頁京連合印刷昌版部、一九八三）
・日本名跡叢刊第十四回配本　鎌倉　墨流本和漢朗詠集「上巻・下巻」（株式会社二玄社、一九八九年）
・国宝西本願寺本三十六人家集刊行会『西本願寺三十六人家集』別冊二（墨水書房、一九七四）
・広辞苑第五版・新村出／一九九八岩波書店
・小松茂美「日本名跡叢刊第14回配本鎌倉墨流本和漢朗詠集・一九八九年」

（資料提供：常陸太田市無形文化財　小室久氏、装飾料紙鑑屋、調査協力：出光美術館・学芸員　金子馨氏）

平成二十九年十月十五日作成
令和二年　九月四日　改正